

教育研究所報

佐賀県立教育研究所

6号

特集 特色ある学校調べ

もくじ

- ・古巣にもどって……………(1)
所長 花島 広次
- ・学習指導の近代化とティ
ーミングマシン……………(2)
所員 久保山 幾男
- ・特色ある学校……………(3)
小学校・中学校・高等学校・
家庭生活における適応的態
度について
所員 向井 正之…(7)
- ・歴代所長随想
第十一代所長 須古将宏…(6)
- ・教育資料紹介……………(8)
図書・紀要

古巣にもどって

所長 花 島 広 次

4月の異動で教育研究所勤務を命ぜられた。ここには、昭和31年から3年間つとめたことがあるので、さしずめ10年目の出もどりということになる。その間も時おり出入りしていたことに最近2年間は学校教育課勤務であった関係で内部のこともよくわかっていたので、新しい職場というより親しみ深い職場であったわけである。そして10年前とは比較にならない程新しい感覚と緻密さで研究にとりくんでいる各所員の研究姿勢に力強いものを覚えている。

大学紛争は過去の教育に対する反省を求めているし、月への着陸はもはや時間の問題となった。今日の時代はこの二つの事実によって象徴されると思うが、このような時代に生き、そして次代を背負い得る人材となすために今日のこどもたちにいかなる教育をなすべきか——その目標内容方法——について今日ほど真剣に考えねばならぬ時はない。国立教育研究所長平塚益徳先生が言われるように「現代は教育爆発の時代」であり、世界各国はそれぞれ自国民の能力の極限の開発を目指して精魂を傾けており、わが国においても過去の経験と将来の展望に立って小・中高校の教育課程改訂が進行中であり一人一人のこどもの最大限の伸長を期しているのである。

およそ教育制度やそれに伴う万般の施策は結局教育実践に当る先生方の手によって結実させられるものである。今日いろいろな思潮、科学技術の進展とそれに伴う産業構造の変化等々の情勢の中で、先生たちは常に研究くふうしてよりよい教育実践を期していただけるのであるが、その職務内容は極めて高い専門的資質を要するものであり、かつ時代の進展に伴って資質をさらに高めていかなければならない。けれども多くの児童生徒を受持つてその一人一人にきめ細かい指導をするためには、先生たち自身の研究研修の時間をつくり出すことは相当困難であろう。また、教員養成機関在学中はじっくり勉強されたであろうがそれは教師になるための絶対必要条件——従って必要最小限——を満たす程度に過ぎなかったと思われる。卒業後教師になって10年、20年とたてば経験は豊かになろうが一方時勢は常に変動していく。この間にあって教師としての専門職を全うするためには不断の研究・研修によって自らを高めることは

必須の条件であること論をまたないところである。

ここにおいて、時代の推移に即応し次代の展望に立った教育観のもとに、あるべき教育の姿、教育の内容・方法等について継続的に研究してその成果を学校その他の教育機関に流し、また現場の先生たちのための研修計画を策定・実施し、教育関係資料を蒐集整備して広く教育関係者の活用を便をはかり、あるいは先生方や広く県民からの教育相談に応ずる等のために教育研究所が設置されているのである。今日、各都道府県や指定都市はもちろん、市町村にも教育研究(研修)所の設置されているところが多いがさらに研究と研修のために大規模な総合教育研究センターを建設している府県も全国の過半数に達しており、ここ数年のうちに殆どの都道府県がセンターを完備するすう勢にある。

もちろん、教育についての研究や研修は県教育委員会の行う教育行政と遊離してあるべきでなく、指導と研究は車の両輪というよりも紙の表裏のごとく一体でなければならない。研究は指導の前提であり指導は研究の普及であると言えないだろうか。だから当所においては常に県教委の指導方針をふまえて研究を進め、ともどもに県教育振興に寄与しなければならない。指導行政も現場それぞれの実態に即して行われるであろうし、研究所も単なる抽象的原理原則論にとどまることなく、常に本県の実情の上を立てて直接現場の役に立つ仕事をしなければならないと思う。

しかし前述の役割を果たすためには当研究所は人的規模においていかにもふじゅうぶんであり、他県と比べても大いに遜色がある。全国的すう勢、九州各県の実情と対比しながら、研究所本来の役割を果たすために、今後大いに拡充整備に努力して、本県の教育振興のために教育現場の踏み台としての機能をじゅうぶん果し得るようにしたいものである。もちろん、それまでは与えられた現在の条件下において各所員協力し励まし合って、徒らに背伸びすることなく、着実に、現場のために実効ある研究に努めていきたいと思う。

今後学校の先生方はもちろん、広く教育関係各位のご理解と研究推進についての一層のご協力をお願いすると共にせいぜい研究所のご利用をおすすめする次第である。

学習指導の近代化とティーチング・マシン

所員 久保山 幾 男

学習指導形態としての一斉授業は

- ① 同一の時間と場所で大ぜいの子どもに対して、多くの内容を伝達できる。
- ② 子どもたち相互の刺激によって、学習の成立を促進する。等の特質や、教師の説話や問題形式のくふう、話し合い方式の導入や強化など、長い年月を経て累積されてきた所産に支えられながら、今日まで教育現場で、最も多くとりあげられている学習指導形態である。

こうした反面、一斉授業には、

- ① 教師中心の画一化された学習指導に陥りやすい。
 - ② 受動的な学習になりやすい。
 - ③ 学習活動が一部の子どもに限定されがちである。
- 等、一斉授業の落ちいりやすい欠陥として、「学習を個別に成立させることの困難」が指摘されている。

しかしながら一斉授業は、その特質や、わが国の教育制度、学校建築の様式・施設・設備、教授組織の現状、さらに指導内容の増大化などと深く関連しながら、今後もさらに継続されていくものと思われる。

このような中で、「学習者ひとりひとりについて学習の成立を図る」には、一斉授業のどこを改善したらよいだろうか。ここで一般的な改善の視点をあげるなら、

- ① 授業を進めるにあたって、必要な情報の提示や学習活動の指示を、ひとりひとりの学習者に、的確にそして力強く伝達すること。いわゆる視聴覚教育のねらいは、視聴覚的方法によって、その「刺激の強化」をはかり、必要な刺激が確実に学習者に伝達することにあると考えられる。

たしかに、ことばや文字だけでなく、映画・スライド・テレビ・ラジオなどの近代的教具を使って、刺激の提示の強化をはかることは、学習をうながすうえで、きわめて有効であることは広く認められている。

- ② しかし、学習指導の究極的課題が、「学習を個々に成立させる」ことにあるならば、単に刺激の強化をはかることだけでなく、「刺激に対する反応を強化すること」が、くふうされなければならないだろう。いかえれば反応の場をひとりひとりの学習者に与えることである。しかもそれは反応しやすい場でなければならないし、また、その反応が第三者にも容易に観察されるような、明白な形で表現されることが大事であろう。

そのためには、学習者のだれもが反応しやすいように、じゅうぶん手がかりをそなえた刺激の提示のくふう、たとえば発問のしかたなどのくふうや、反応の手がかりとして、前もって選択肢を用意しておいて、学習者に自分の判断と合致した選択肢を選ばせることなども、その方法の一つであろう。しかも選択肢法であれば、その反応は明白な形で確認できるわけである。もちろんこの場合、用意される選択肢は、子どもの思考の実態をふまえ、合理的なものではない。

- ③ 改善のための第三は、学習者の反応の結果について、正確な情報を集め、その分析に基づいて、次の刺激の提示の内容や方法の修正、すなわち教師の立場へのフィード・バックの成立をはかることであろう。もしこのことがなければ、学習者の学習成立状態は不明確となり、学習指導上り返しのつかない過誤を犯すかもしれない。

- ④ 一斉授業改善の第四の視点は、学習者自身が自分の反応を自己評価する。すなわち学習者の立場へのフィード・バックの成立をはかることであろう。教師が提示した刺

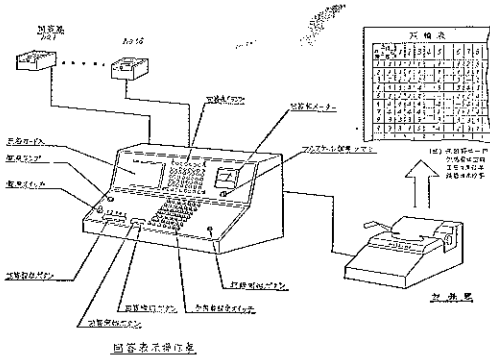
激に対して、学習者が反応したとき、教師はそれを分析し、学習者自身が自己の反応を自己吟味できるように、積極的な働きかけをすることであろう、

この点が、これまでの学習指導でいちばん配慮が足りなかった点であろう。

幸いにして、ティーチング・マシンの開発は、学習者の反応の即時確認・分析を可能にし、またその結果をただちに教師や学習者へフィード・バックするという、学習指導改善のきめ手の一つを与えてくれることになるであろう。

当研究所でも遅ればせながら、本年度から「ティーチング・マシンを導入した一斉指導の改善に関する研究」、と取り組みティーチング・マシンによって、学習指導法改善の方法を、より科学的に究明するため、佐賀市立赤松小学校の積極的な協力によって、ティーチング・マシン（今度導入するのは厳密にはアナライザーとよぶべきであろう）による学習指導改善のための実験的研究をすすめようとしている。

下図は、そのティーチング・マシン（アナライザー）の機構の概要である。



授業の中にティーチング・マシンをどう位置づけるか。

学習指導改善のために、ティーチング・マシンを利用することは、きわめて効果的と思われるが、それはこの機器をうまく活用することが前提であることはもちろんである。では、この機器を授業の中に効果的に位置づけるためには、どのようなことに留意すべきであろうか。

第一は、ティーチング・マシンは、本来学習者の学習過程における反応を分析するものであるから、これによって、教師と学習者との間のコミュニケーションを、強化するような使い方をすべきであろう。

第二は、反応分析にもとづいて、学習指導過程に改善を加えるわけであるから、どのような反応を分析するか、妥当な反応を受けとるための、学習プログラムの妥当な編成が必要である。いかえれば、有効適切な反応の場を用意し、効果的な反応分析をしなければならない。有効適切な反応分析の場面としては、

- ① 学習者のレディネスの状態を調べる場合
 - ② 学習の各段階で、子どもの思考傾向や、理解の度合いを確認したい場合。
 - ③ 学習結果について、理解の度合いや知識の深さ、あるいは思考力の深さなどを調べたい場合。
- などが考えられる。また「テスト・マシン」的な使用の場も考えられるわけである。

以上、学習指導近代化の有効なきめ手の一つとして、開発されてきたティーチング・マシンの機構や、その有効な使い方などについて述べたが、この所報がお手もとに届く頃、赤松小学校における、ティーチング・マシンによる学習指導改善の研究も、その第一歩を踏み出していることと思う。この研究についても、先生方の積極的なご指導をお願いしたい。

特 色 あ る 学 校

小 学 校

校内交通公園を中心とした交通安全指導

鳥栖市立基里小学校

昭和43年、学校近くの交差点(国道3号線)をそのまま再現するといった規模で、交通公園を作った。特設時間、常時、随時指導に毎日ここを利用する。交通安全の定着化の一つとして、動作や行動、特に基本的なものを随時、正確に行なう指導が、今年度のねらいである。

特設時間には特に、動作や行動を分析的、総合的に繰返し指導する。実際現場そっくりのため、真剣に学習する。特に低学年ほど興味を示し、効果もあがるようである。



交通公園全景(基里小学校庭)

国語教育の充実をめざして=「深く読む」=

武雄市立武雄小学校

児童の文章にたちむかう態度を、表現に即して深く読む姿へ高めるために、どのような手だてをもって、読みの力を確かなものにするかを研究の主題としている。そのために、つぎのような学年課題をもっている。1年=語句や文の意味の切れめに気づかせるための手だて。2年=人物の性格・心情の変化を場面とむすびつけて読ませるくふう。3年=語句の意味とはたらきを文脈の中でとらえさせる手だて。4年=感想や意見をもたせる読ませかたのくふう。5年=表現に即して、文章の細かい点にまで注意して読みとらせる指導過程のくふう。6年=文学作品における心理・心情をどう読ませるか。この課題の表現は、研究の過程において多少変更の余地がある。

主体的国語学習の指導

川副町立西川副小学校

昭和20年後期から「個性伸長を希念する教育」という一貫した命題のもとに研究実践してきた。

現在は、国語の研究を軸にして「主体的態度でとりくむ授業づくり」の研究実践によって命題にせまっている。

このために、児童に自覚と自発性を求めるとともに、教師自らも主体的に学習指導にあたるようにしている。

そして、低学年は「国語を好きにするには」中学年は「国語の力をのばすための協力的態度育成」高学年は「主体的国語学習の定着化」をめざして取りくんでいる。

思考と認識を深めるための社会科指導

唐津市立外町小学校

昭和41年度より2年間市の研究依頼、43年度より2年間

市及び県の依頼を受け現在に至る。特に資料の精選と授業への位置づけからテーマに迫ろうとして、今日まで努力を続けている。本年度は、特に、資料を生かした授業とその分析に力点を注いでいる。児童の思考が深まり得る資料作成、授業実践のための指導法の研究等、多忙を極める中に児童が少しずつでも伸びて来たことを嬉しく思う。

研究体制としては主として、低・中・高学年別グループ単位で授業研究及資料作成にあたっている。むだのないきめの細かい資料、そして、その資料を最大限に活用して社会科の真の学力を身につけさせたい。——本校教師の念願である。

「科学的思考力を培う理科学習指導の

望ましいあり方」の研究

佐賀市立赤松小学校

本校は昭和42年度から、上記の研究主題に取り組み、全職員の授業研究会を通して、研究を進めている。

研究内容

(1) 分野(物理・化学・人体・地学)における望ましい学習指導の研究

(2) 学習指導過程における「関係的な見方・考え方をどのように育てるか」の研究。

なお、学習指導に必要な施設も漸次充実していく計画である。

(3) 理科学習指導におけるティーチングマシンの効果の研究。

思考力を養う放送教材の利用(理科)

三根町立三根西小学校

テレビ教材の機能を検討し、拒否でなく過信、放任でもなく、テレビの特性限界を、十分認識し、子供の思考力を高めるために、そのよさを認めて活用する。

1. 継続視聴

テレビ理科番組を継続視聴することにより、問題解決の方法を体得し、事象の構造的な見かた、考えかたを知り、いろいろ角度から、物を見ることが出来る。

2. 指導計画

学習目標、内容を達成するため、テレビを含めた教材を組織し、さらに地域の実態を考え、融合的にくみこむ。

3. テレビ教材の、学習利用の観点をしっかり把握し、活用する。

① 直接経験することのできないもの

② 自然観察、継続観察の観点をつかむため。

③ 実験観察の結果比較、吟味のため。

④ 実験観察の考えかたや、手がかりのため。

⑤ その他

4. 発問、板書の工夫

内容を充実させ、問題を発見させ、思考力を深めるうえにも、ぜひ研究が必要である。

算数を通しての「思考力の育成」

——関数を中心にして——

塩田町立塩田小学校

「健康で豊かな人間性の陶冶と自主的に努力する人間を育てる。」と言う当校の教育目標達成の一面として算数教育を通して創造力、思考力の育成をめざす実践的研究にとりくんだ。物事を筋道をたてて総合的に考えたり、判断する態度育成の基本的概念の一つとして関数的な考え方の実践指導にとりくんだ。全体への洞察力より分析へと言う構

造的思考を重視し問題解決を通して算数的な考え方を身につけさせたい。

そのために実践指導の計画、展開、事後処理に最大限の努力を払いたい。

主体的学習態度の育成をめざして

佐賀市立循誘小学校

教科の基本的な観念や原則を理解させ、また方法や態度を身につけさせることは、単なる受動的な、そして教科書や参考書を後生大事に記憶するような学習からはもたらされないことは明らかである。子どもの学習意欲をたかめ、自主性を重んじ、独自の発想やよい思いつきをたいせつに扱って主体的態度を育てていきたい。

主体的な読解力を伸ばすには

どうしたらよいか

鹿島市立鹿島小学校

沖山光氏の提唱しておられる。意味構造論をふまえた国語教育の研究に昨年取りくんでいる。

この研究の主な特徴を述べると次のようなことがあげられる。

- (1)学習の主体を児童にかえす学習であり、自分自身で読解する力をつける学習である。
- (2)児童の思考能力を伸ばす学習である。
- (3)教師自身が指導書などに頼らずに思考し研究しなければならぬ指導である。
- (4)トレーニング教材の実践指導によって基本的指導をする。
- (5)この学習方法を取り入れたら全教科の力がつく、本年度中に研究発表を公開してご批判を仰ぐ考えである。

自主性を育てる指導過程の研究

——全教科にわたって——

佐賀市立日新小学校

教育は、子どもたちの本来性を伸ばすものである。子どもたちが、やってみたいという気持ちを尊重し、おもしろいという気持ちをおこさせ、できる、できた、という満足感を、ひとり、ひとりの子どもにいだかせ、子どもたちの積極性を伸ばしてやることに自主性を生むことになると思う。全教科をとおして、本来、自主的である子どもたちの意欲を阻害しているものを解明し、自主性を育てるために、指導過程を科学的に分析し、吟味したい。

創造性をめざす理科教育

三田川町立三田川小学校

児童の創造性を高め、新しい事象に接したとき、自分の経験を引き出して、それと関係づけ、それを再構成したり、未知のものへの予想を可能にする能力の養成に努め、これを「わかりかた」ということばに集約し、「わかる」ための「見方」「考え方」「扱いかた」を育てる授業のあり方、そして授業で最も大事な問題意識の醸成の仕方、解決のための構想を整えるどうすればよいか等実践例を記録し、実験観察における低次の概念からの脱皮、わかり方を身につけさせることをねらって研究をした。

実態に即した学習指導法の改善

富士町立北山小学校

国語……文章を全体的につかむ→つかんだことを文章に即して確かめる→確かめの上で立つて主題や要旨を決定していく学習過程を研究している——その間、T・C反応器を活用

算数……思考力をのばすことをめざし、問題の意識化→解決のための予想→解決のための思考検討→概念化→適用といった学習過程をとる。

理科……一連の思考活動の順序に従って、問題をつかみ→事実を調べ→仮説を立て→確かめ→法則化し→適用するといった学習過程をとっていく研究——その間、アンサーチェッカー活用。

(昭和42年 43年度、県立教育研究所、研究委嘱校であった)

中学校



安全教育を基盤として自主性を目差す生徒指導

東脊振村立東脊振中学校

歩ゆみと方向 40~41年度学校安全研究指定校、調査検査を総合的分析し、個人を知り全体指導や個人指導を通し安全生活の習慣化を培う、42年度交通安全指導を強化する。

43年度生徒会活動学級活動を盛んにし週番制の廃止係活動、更にJRC加入等によって安全行動の定着化を目差す。この間教師側としてはすべての資料を活用し生徒指導特に個人指導の徹底を計る。

今年度は上記テーマにより生徒指導の強化の過程に於いて、学級活動と生徒指導のありかたをほりおこし安全行動の定着化から生徒1人1人が自信をもってたくましい実践活動ができるよう研究を深化してゆきたい。

主体的学習態度の育成

基山町立基山中学校

本校の地域は商工業地の中間、県の最東端に位置し、産業観光的立地条件に恵まれ一般に家庭経済は安定し、教育に対する関心が強く生徒は自主的な学習意欲が不十分であるが恵まれた環境にほとんどが進学就職希望で家事従事者が少ない。わたしたちの目ざすものは生徒が目を見かねて問題に迫り一人一人が主体性を持って考えぬく知恵を出し合って考えぬく集団であるように育てることにある。地域生

徒教育の現状から本校の研究主題を上記の如くし、個人の完成をめざす全人教育、強じんな意志と実践力の養成道義心の昂揚協調的態度の育成に努めている。

基礎文型の運用(英語)

伊万里市立伊万里中学校

英語は聞く力、話す力、読む力および書く力のバランスがよくとれて、はじめて英語学習の基礎を習得したことになるわけで、ある内容を英語で正しく表現することは、たいへんむづかしい。そこで、英語の表現力と書く力を向上させることを目的として、佐賀県の実態に応じた文型を二ヶ年の授業研究のなかからとりあげて、英語暗唱文型集各学年用を出版し、英語学習の基礎づくりを行なっている。一方授業の中にこれを毎時とりあげて、継続的に積みあげることによって、生徒の英語学習の興味を喚起し、主体的学習態度を確立しようとしている。教えこむ教育から脱皮し、学びとる学習態度をいろいろな方策をたてて全員で努力している。

英語科学習における能力別指導について

鎮西町立名護屋中学校

本年度の研究課題として特に次の3点を中心として進めたい。

- ㊤ 上中下能力編成に応じたカリキュラムの作成。

(進度は同一であるが、能力指導方針に応じたカリキュラム)

⑨ 個人診断カードの累加記入の研究と個別指導法の研究 (能力別編成の中で特に大切なことは、個々の生徒に対する、たゆまざる観察と指導である。担任との密接な連絡をとり、個人カルテに累加記入して生徒の学習効果を昂める資料を作成したい)

⑩ 評価の研究と組編成 (ペーパーテストによる評価のみでなく個人カルテを参考とし評価及び編成を実施。クラス替えに伴う種々の問題点)

分析課題による主体的学習 (社会科)

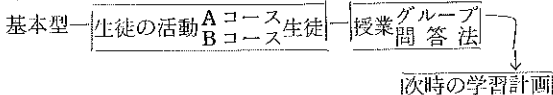
相知町立相知中学校

① 授業の主体者は生徒である。問題意識は思考のはじまりである。

② Aコース、Bコースの二種の課題を与え、生徒の自由選択とする (一単元内では選択コースは原則として変更しない)

③ 課題作成は、中単元毎にプリントして与え、Aコースは発展的、思想的課題、Bコースは基本的事項、基礎的事項を中心とし、教科書で解決できる課題

④ 授業の改造



学校生活における望ましい行動の習慣化

佐賀市立成章中学校

人と人、組織の結びつきを緊密にし、学校体制のもと、日日の実践を通して生活指導の強化を図り、学校生活における望ましい行動の習慣化を期する。

研修の方法

- (1) 個人の自由研究を基盤とする。
- (2) グループ (生活指導企画委員会、生活指導部、教科、学年会) 別に問題を発見したり、対策をねったりして全体研究会に提案する。
- (3) 毎月1回第2水曜日全職員で全体討議をして共通理解をはかり、全体で習慣化に努力する。

学力差に応じた効率的指導法の研究 (数学)

三根町立三根中学校

個人差、学力差の生じ易い教科の特性にたつて

- 1. 学力の実態をとらえ、その原因を究明する。
 - 基礎調査・指導の上から (診断→指導→評価)
- 2. 効率的な指導を検討し改善をはかる。
 - 一斉指導から協力的学習へ (集団化)
 - 学習の手引 (学習カード) による学習の個別化
 - 主体的自主学習態度の育成
 - 〔予備学習→学習 (共同) →反省→練習〕

J.R.Cと結びつけた道徳指導

東与賀町立東与賀中学校

【道徳教育】昭38~39両年度文部省 (第1回) 研究指定校となり顕著な実績を挙げ、生徒教師、両親間の相互理解が深まり、特に何でも話し合える人間関係が生まれ教科指導、生活指導の基盤が確立したようである。

【育友会、JRC活動】町側父兄側の教育に対する熱意が高く昭41年、近隣に跨る50mプールの建設等物心両面の協力がなされ、毎月実施の学級育友会も70%に近い出席を示し県下ばかりでなく、長崎、福岡、熊本県下より例年17~18回の学校、育友会の参観を受けた。育友会は昭39県P昭40県表彰昭42文部大臣表彰。JRCは昭44県表彰を受けた。

【研究】小中一貫して「主体性に培う教育」

楽しい学校生活をめざす生徒指導

鳥栖市立鳥栖中学校

中学生の段階は心身の発達がいちじるしく社会、学校、家庭生活などに不適應をおこすことが多い。この障害を除去するように援助指導して適應化をはかり、すべての生徒の人格形成にはたらきかけていく。その機能によって生徒のもつ可能性や潜在能力を正しくのばす積極的な生徒指導によって非行防止もはかっていく。

生徒の自己理解にせまり自分の問題として意識化させ、成長への欲求をふるいたたせ、自己実現がなされてこそその面的な充実した楽しい学校生活がおくられると考える。

課後に位置づけた30分間の学級活動の時間に「学級の話しあい」や「面接相談活動」が今年の特徴である。

生徒指導と同和教育の推進

唐津市立第二中学校

本校区は唐津市の西部に位置する広大な地域である。かつては農村・漁村と港湾関係労働者を中心となっていたため、他地域に比し言動は粗野であるが民情がこまやかで純朴な気風を宿していた。最近商工業の目ざましい発展と都市化傾向によって社会構造も複雑化し、生徒に及ぼす影響も強く、学力の向上、生徒指導、進路指導は当校教育の極めて大切な焦点目標である。なお本校区には同和地区もあるので、部落解放を目指した同和教育の推進を本校教育の重要な使命である。われわれはかかる地域の特殊性にかんがみ、生徒指導と同和教育を一体的に推進するため標記の研究主題を設定して、自主的積極的に全教職員協力一致して研究に取り組んでいる。

よりよき学級経営を基盤とした進路指導

肥前町立肥前中学校

進路指導は本地域の生徒に対しては特に重要であることが痛感され、これを重点的にとりあげてきた。殊に昭和42~43年度においては日本職業指導協会並びに県学会の研究特別委嘱校として指定をうけてこれに努力し、ある程度の成果もあったものと思う。然し進路指導のよりよい経営は、単に研究委嘱校云々たるものでなく、今日の中学校教育の課題ともいうべき人間性の開発や、その学級経営の基盤として更に強く要請されるもので、教師たちが学級経営に没入するような姿勢こそ大切であり、その基盤にたった進路指導を全校的課題として進める。

特色ある調理室の施設設備をいかした指導法

神埼町立神埼中学校

神埼中学校技術・家庭に於ける女子コースの施設設備は、設備基準の比率によると、被服関係は52%調理関係は95%となっている。特に調理室の広さは、85.7平方メートルで排水設備に少々難点があるが、通風・換気・採光にも恵まれた環境である。よってその活用を盛んにし教育効果を高めるため、昭和38年度以来生徒の調理実習指導の作業票を作成し、実態に即して是非の発見と同時に年次計画でその改善を計り基礎的技能の習得と作業の計画および実践活動のできる指導法をとっている。

科学的思考力を育てる学習指導の過程

嬉野町立嬉野中学校

理科の学習指導では学習者個人の科学的思考力が育成されなければならない。科学的思考力は探求の過程を通して育てられると考える。何をどのように指導すれば、どんな能力が育てられるかについて、指導過程を通して研究を進めたい。

この目的を達成するために、科学的思考力と個人の特性との関係を考察し、指導過程において科学的思考力を育てるための指導法および指導の効果の確認の方法について研究を進める考えである。

高等学校

学校農場の運営と実験実習のあり方

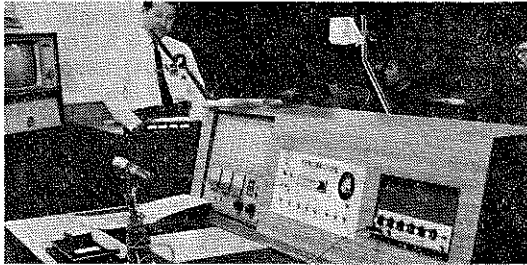
佐賀県立佐賀農芸高等学校

農業の急速な進歩発展に伴う農業教育刷新の方向として、教育内容と指導方法の充実をはかり、教育効果の向上を期するために農業に関する実験実習の必要性が特に重要視され、農業教科目全般にわたり実験実習指導項目表をつくり昨年 8 月には学校農場の生産と管理について運営資料を作成、九州地区農業教育研究大会に研究発表し、県高校教育研究会農業部会の委嘱による本校現状の建物備品職員生徒数及水田を具体的対象とした実験農場の設定と農場運営のあり方と題し、本年 1 月県下農業高校の御協力により一応の成果をまとめるに至った。

教育機器の効果的利用

佐賀県立唐津工業高等学校

本校では、TM (集団反応分析装置)、スライド映写機、16%映写機、テレビ、VTR、OHPなどの教育機器を



マルチ・スクリーング方式による授業風景

、手軽にすぐ使える状態まで自動化した視聴覚教室 2 教室と、LL 教室 I 教室をもっていますが、昨年度から、その最適利用システムの開発をねらって、県の指定研究「教育機器の効果的利用法」に精力的に取り組んでいます。ところが、最近相ついで、専門誌「新電気」や「視聴覚教育研究」の誌上に、「教育学を推進するパイオニア校」の一つとして全国的に紹介され、ようやく、私達の努力も世間に認められつつあることを感じています。

歴代所長 随 想



第十一代所長 須古 将宏

私の研究所長としての在任期間は長いものではありませんでした。しかし、昭和35年に所員に所員に任命されてから、途中理科教育センター所長に転出して3カ年の空白はありましたが、今春退職するまでの前後9カ年にまたがるつながりは、私にとって最も長かった職場となり、この間の数多い思い出はおそらく終生忘れられないことでしょう。

最初に入所した頃は、教育研究所の存在が教職員にさえあまり知られておらず、予算も年間50万円そこそこに過ぎませんでした。その後所員一同の非常な努力の結果、義務制学校の悉皆調査による「学力要因基礎調査」や「全国一せい学力調査結果」の全県集計と分析研究、高等学校新入生に対する「一せいテスト」の実施等によって、今日ではもう知らない人は無くなってしまいました。

予算も漸増し、44年度当初は290万円強となりましたが

読書指導

佐賀県立小城高等学校

人間形成のために読書は欠くことのできないものであるが、テレビ・雑誌の氾濫で高校生の間でも読書の機会が失われている。

本校では読書指導の必要を感じ、全校を挙げて読書感想文の指導、集団読書(読書会)の指導に力を入れてきた。そのなかで特色と言えるのが新入生に対する読書感想文の課題であろう。合格者登校の日に関心する図書を指定し、入学式までに読んで感想文を提出させる。優秀作品は図書館で表彰し、さらにクラスごとに製本して回覧するとともに、クラス担任に読んでもらって生活指導にも利用している。

ホームルームを基盤とする生徒指導

佐賀県立多久工業高等学校

本校はすべての生徒の健全な人格の発達や自己実現を援助するために、生徒指導の実践的研究をホームルームを基盤として推進する。そのために生徒と教師の望ましい人間関係の醸成をはかりながら次のような研究を進める。

1. 生徒理解のための諸資料の整理とその活用法の研究
2. ホームルーム、生徒会、クラブ活動等の集団の場における生徒指導の研究
3. 教育相談による個別指導の充実。特にホームルーム担任の教師による教育相談の研究
4. 問題生徒の早期発見とその指導法の研究

教育課程の研究

佐賀県立牛津高等学校

(食物科における女子の特性と、進路等に応ずる教育内容の改善に関する研究)

よりよい家庭をつくり、次代の子女の育成をめざす家庭科教育が、現状でよいか、また食物科の教育目標には、よき家庭人の育成と、食物に関する専門技術者の育成の両面があるので、教育課程をその両者の立場から検討した。

高等学校の教育課程としての食物に関する学科の歴史はまだ新しいだけに、他の家庭科に関する科目と食物科の関係、食物科内部の科目の関連、専門科目の内容の配列等問題点は多い。また専門の知識と技術を、如何にマッチさせていくか、若い生徒の興味や、社会の要求にどう対応するかなどについて、研究を行った。

ここまでになったかには、歴代所長の並みなみならぬ努力の集積があったことは言うまでもありません。

しかし、それにも増して苦心したのは、所員の定員増の問題です。研究所費の財源は純県費なので、県が再建団体に指定されたとき、開所以来8人であった定員を6人に減らされ、その後39年度から「あと指導主事」1名の増員を認められただけで、今日なお7人とどまっております。これは残念ながら全国都道府県立中最下位の数字であります。

県の教育水準を引き上げるためには、単なる行政指導のみにとどまらず、基礎的な教育研究を活発にして現場に生きた資料を提供し、あるいは研修事業を活発にして基礎的な知識・技能の現職教育を充実し、全般的底上げによる指導力の向上を図らなければならないと思います。

研究内容は、調査研究の段階からしたいに実験研究への比重を増し、42年度から初めて研究協力学校の委嘱を始め

ました。

研修事業については、35年度から研究所を母体にした研究・研修機関設立の予算要求を始めましたが、これは38年度からの本県教育計画（5カ年計画案）に取り上げられ、その第一着手として理科教育センターの設立が実現したのでした。43年度には、研究所自体での研修事業を思い立ち、全所員が講師を分担して「教育評価研修会」を開催しましたところ、自由参加の催しであったが夏期・冬期の休業を通じ8会場に440人の受講者があり、きわめて好評であ

ったことは大きな感激でした。

このほか、研究所の図書資料は県立教育図書館と言え程度の内容のものにしたい。教育心理の専門家を入れて教育相談部門を開設したい等の夢は遂に芽が生まれませんでした。

さいわい今年は、新所長を中心に、教育総合センター設立への機運が盛り上がると思われます。本県教育の発展向上のため、研究所が飛躍的に充実発展することを心から願っております。

家庭生活における適応的態度について・「親和」についての考察（小学校の場合）

所員 向井正之

子どもの「家庭生活における適応的態度」ということについて、前号までは主として領域間（子どもの家庭生活を不安、経済、労働、教養、親和、近隣交友の6領域にわけたもの）について親と子の両面からみてそのずれを考察してきた。しかしそのうちで「親和」の領域が、もっとも親と子の適応度のずれが大きかった。そのため、「親和」の領域の問題内容（15問）について考察をくわえ、その問題点をさぐってみたい。

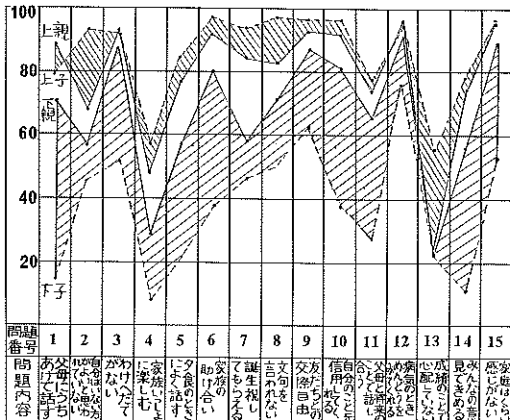
「親和」の領域について、子に15問の調査問題と、それらの子の親（子に対応する親）に子どもと同じ問題15問をあて、子ども1341名（親も1341名）に調査をしたのであるが、ここでは、この全調査対象（子ども）の中から上位群（15点中、得点12点以上の者433人）と下位群（15点中得点7点以下の者191人）を抽出し、またこれらの子の親を抽出して親子のずれを中心に考察を試みた。（調査問題省略）

1. 考察

まづ（図1）によって、得点傾向の特徴的なものとして次のようなことをあげることができる。

- ① 上位群の子どもと親では子どもの得点が高い、下位群では反対に親が高く、子どもが低い。
- ② 上位群と下位群の得点傾向はだいたい同様であるが、それぞれの子どもと親の差異（ずれ）は上位群より下位群の得点差が大きい。
- ③ 問題4・9・11・12・13・15については、上位群、

（図1）上位群、下位群の子どもと親の比較（親和）



上位群子、下位群親、下位群子の得点傾向が同じで、しかもそれが強くでている。

子どもと親の差異（ずれ）、ならびに上位、下位群の親子の得点の低い項目（問題）を列挙することはここでは省略し、いくつかの問題点をひろってみよう、

- (1) 下位群において子どもと親の差異（ずれ）が大きく親が得点が高く、子が低い。（図1）いいかえると下位群の子の親は子どものことをあまり理解していないということが出来る。これは紋切型の親の態度が子どもとの間にずれを生じさせると思われる。このようなことからして、親として子どもを理解するための態度をじゆうぶんに考える必要であろうか。そうでないと、

子どもは欲求不満におちいり、いろいろな問題行動をおこす可能性もでてくる。

- (2) 1の問題（両親になんでもうちあけて話すことができる）が下位群の子どもでも得点が低く親とくらべて差が大きい。子どもが親にうちあけて話すことができないということはどういうことを意味しているか。それは子どもの性格、家庭の家族構成、経済状態、その他のいろいろの複雑な条件がひそんでいると思われるが、これについてのくわしい調査はできなかった。しかし下位群全数1341人のうち191人の平均がこのように低いということは、家庭教育上大いに考えなくてはならない問題であろう。

- (3) 4、（家族そろって何かを楽しむ）11.（父母と将来のことで話し合う）13（家族の人は自分の学業成績のことはあまり心配していない）の項目は上位群の親子、下位群の親子、共通して得点が低くなっている。

また、下位群で、5（夕食のときは家族の者みんなが話し合っ食べる）14（家庭で何かを決めるときなどみんなの意見を決めている）は得点が低い。

これらのことから総合的にいえることは、家庭における子どもとの話し合いが少ないのではないと思われる「話し合い」ということは何も子どもをあまやかすことではない。紋切型に子どもにいうのではなく、なっとくのいく心のふれあう話し合いが必要である。また、家の人とよく話し合うかという調査（6年生333名）では（表1）父親との話し合いが不足しているようである。過半数の子どもがあまり話し合わない状態にあるのである。この点についても、考えなおさなくてはならないことであろう。家庭生活における話し合いは相互の内面交流のよい機会であり、親和感を高めることと強い関係があるにかかわらず、それが子どもにとっては不満な状態にあることは、親和感がうすれていき、家族員は孤独と疎外感を増す結果となろう。

（表1）家の人とよく話し合うか（6年333名）

対象 性別	父と			母と			きょうだいと		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
選択し よく話し合う	47.3	28.5	38.7	78.0	84.1	80.6	75.8	72.2	74.2
あまり話し 合わない	48.4	63.6	55.3	20.9	12.6	17.3	19.3	20.5	19.8
無 答	4.4	7.9	6.0	1.1	3.3	2.1	4.9	7.3	6.0

- (4) 13（家族の人は自分の学業成績のことはあまり心配していない）では上、下位群の親子とも得点が低いこれは学業成績のことであるので親子とも大なり小なり、心配があるものと思われる。したがってその心配の内容、質にもいろいろ問題をふくんでいることであろう。

2 おわりに

家庭生活において欲求不満があるということは内容によっては必ずしもマイナスの面ばかりではない。かえって不満であることが、適応しようとしてこれを克服して積極的にプラスの方にたち向っていく態度を生むかも知れない。これらの研究についても今後なされなければならない課題であろう。

教育資料紹介 <<図書>>

○ 未来からの教育 ~現代教育の成立と課題~

大阪大学教授 森 昭 著

著者の「序文」の中からひろってこの本の内容を紹介しよう。

「現代のわれわれは、青少年の発展と容赦なく追いついていく急激な発展、いな、大人のけんめいな努力さえも追いつけないほどに急激な発展と変化のただ中に生きている。将来、それがどうなるか、だれも確定的には予測することができない。しかし新しい未来がわれわれと青少年を待ちうけていることだけは疑いない。われわれが青少年を未来へ準備する責任を果たすべきであるならば、未来からの挑戦に対応できる能力態度を青少年に形成せねばならない。この責任を自覚的に受けとめようとする教育、それは「未来からの教育」とよぶにふさわしい。これは序文の一節であるが、要するに、未来からの挑戦に正しく、かつ有効に対応できる青少年を育成するために、現代の教育実践の果すべき基本的な課題はなんであるか、ということ述べた。教師にとってたいへん参考になる図書である。

○ 授業分析の方法 重松 鷹 著

授業分析の理論から、具体的な分析の事例までかかげてある。授業の分析研究をしようとする際に一読する必要がある図書である。

○ 適応の心理 北村 晴朗 著

適応についてわかりやすく説明してある心理学の本である。適応ということを理解するためにはぜひ読んでほしい図書である。

○ 集合の考え—その指導事例(算数科)

監修者 山口大学教授 広川 清隆
編集者 山口県小学校教育研究会算数部

集合の理論と、小学校の算数指導における集合の考えをとり入れた具体的な指導事例を数多くとりあげてあり小学校の算数指導上、たいへん参考となる図書である。学年別に集合の考えを入れた指導事例が多いことはこの本の特徴である。

○ これからの特別教育活動

宇留田敬一監修 小沢恒三郎ほか 著

学校現場において多くの問題点をかかえている特別教育活動の、児童、生徒会活動、学級会活動、クラブ活動評価の各領域について、今日もっとも問題とする点について、具体的な解決の方途を述べてある。

<<要 紀>>

○ 精神障害児判別研究 II S44, 3

和歌山市立教育研究所

特殊学級入級対象児の判別の方法として、A児、B児C児について、WISC知能診断検査、親子関係診断テスト、クレペリン精神作業テスト、PEスタディーの諸検査を実施しその結果の考察をしてある。

○ 中学校英語科学習指導に関する研究(1)(研究紀要26集)

S44, 3 石川県教育研究所

現在完了に関する実態調査報告、中学校における英語科文法事項のうち、現在完了について生徒の理解がきわめて劣るといわれてきた。日本語にない現在完了という発想を生徒が理解困難なのは当然であるが、現在完了のどの点がどのように理解困難なのかを調査し、その実態を基礎に効果的な文法指導法を研究したものである。

○ 生徒理解に関する研究 (紀要第27, 28集)

S44, 3 石川県教育研究所

小、中学校における学級内の人間関係の理解に必要な基礎的資料を得るため、ソシオメトリック・テストを中心として、性格、行動評定の結果や向性、性格との関連などについて検討を加えたものである。

○ 教育研究 1969, 3, 第25号 佐世保市教育センター

- ・普通学級における能力差に応じた学習指導
学習指導改善に関する教師の意識
読解指導の個別化を意図する実験的授業の研究
算数科におけるアンサーチェッカー使用の学習展開
能力差に応じた数学科指導の一考察
- ・国語教育におけることばの指導に関する研究。
- ・家庭教育が子どもの人間形成にどのように影響するかについて研究がまとめられている。

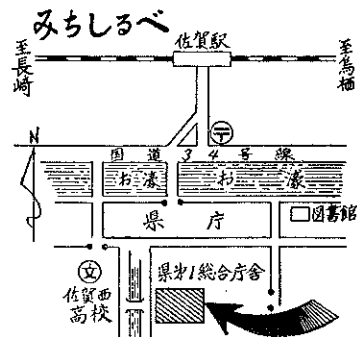
所 内 異 動

4月1日の異動で、つぎのように所長、所員の異動がありました。

退職	所長	須古 将 宏	
転出	所員	木下 巧	佐賀県文化館学芸課へ
転入	所長	花島 広 次	県学校教育課長より
	所員	手塚 静 雄	佐賀県文化館学芸課より

編集後記 今回は学校教育課の「特色ある学校調べ」にもとづいて、各学校にお願いして、研究主題(特色)を解説していただき特集し、広く県下に紹介することにいたしました。この号が、この意味において、現場の自主研究の一助ともなればと思い編集しました。

また当研究所が導入したティーチングマシンは、佐賀市赤松小学校の協力で、実験的な研究が進められることになったので本号を振り出しに、研究の経過などを、今回掲載したい。なお編集者が交代して、読みづらいところがあると思いますので、どしどし皆様方のご助言をお願いいたします。そして「親しみのある所報、ためになる所報」をモットーに、新しいアイデアを加えた編集にしてゆきたいと思ひます。



第 6 号

発行年月日 昭和44年 6月 1日
 編集・発行 佐賀県立教育研究所
 佐賀市内 1丁目6-5
 TEL ④2111内線437
 印刷 福博印刷 K K